日本における近代日本文学研究の現状と課題

日比嘉高

✉ hibi@nagoya-u.jp

This paper reports current trends and issues in modern Japanese literary studies in Japan. First, I discuss the state of universities in Japan amid the current governmental initiative to “reform universities,” addressing the functional differentiation of national universities and the pressures of globalization. Next, I touch on changes in research conditions and the state of publishing, noting an increase in the number of publications based on Ph.D. dissertations by younger researchers and advancements in the digitization of research materials. After addressing current political circumstances that are influencing these matters, I discuss changes in the type of graduate students conducting studies on Japanese literature, new academic trends in modern Japanese literary studies, and insights from the analysis of the JSPS grants (Kakenhi) database.

Keywords modern Japanese literature(近代日本文学), literary study(文学研究), publication(出版), Grants-in-Aid for Scientific Research(科研費), agendas(課題)

1. 日本の大学を取り囲む現状——「大学改革」

本論では「日本における近代日本文学研究の現状と課題」という大きな課題で報告を行う。はじめに日本の大学を取り囲む現状、とりわけ「大学改革」についての概観を提示し、次に研究環境および出版状況の変化について私見を述べる。関連する政治的状况について指摘を行った後、日本文学研究に関わる大学院生についての変化、そして日本における近現代文学研究の最近の動向、科研費データベースから見る最近の動向について短くまとめた。なお本論の元になった報告は2015年5月に行われたものであり、情報の更新は部分的にしか行っていないことを申し添える。

現在、日本の大学、とりわけ国立大学は大きく揺れている。安倍晋三首相が主導して描いている日本の成長戦略のなかに「大学改革」が含まれており、それを受けて文部科学省が競争主義的な施策や要請を次々と繰り出しているからである。

国立大学については、その役割をタイプ別に分化し「機能強化」という方針が打ち出されている。具体的には、卓越した成果を出す海外大学と伍して全学的に取り組むタイプの大学、主地域の課題に応じ貢献するタイプの大学、特色のある分野で世界的・全国的な教育研究を行うタイプの大学という三つのタイプに国立大学は分類され、実際この方針のもと、大学は予算の傾斜配分を受けている¹。大学は自らの存在の理由を方向付けられ、そして方向付けられた大学は、自身の大学構成員にも同じ方向を向くよう、あからさまに、あるいは暗黙のうちに要請することになる。

さらに問題なのは、現政権が主導する「大学改革」が経済的な観点を基調にしているということである。安倍首相は、2014年5月6日にパリで開かれたOECD(経済協力開発機構)閣僚理事会の基調演説で、日本への投資を呼びかけながら次のように述べた。「私は、教育改革を進めています。学術研究を深めるのではなく、もっと社会のニーズを見据えた、もっと実践的な、職業教育を行う。そうした新たな枠組みを、高等教育に取り込みたいと考えています」。

経済的観点から「大学改革」が進められようとしていることを、より端的に表しているのは、議論が「産業力競争会議」によって主導されているという事実である。この会議は内閣府に設けられた日本経済再生本部のもとに置かれた会議で、下位のワーキンググループに新陳代謝・イノベーション部門があり、ここがいま大学改革を論じているのである。

この現政権の方向性は、日本の人文社会科学そして教育学のあり方に深刻な脅威となりつつある。2014年の夏、「「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しに関する視点」について(案)」(2014年8月4日付)という国立大学法人評価委員会の文書が話題となった。そこには次のように書かれていたのである。

¹ 「平成28年度における国立大学法人運営費交付金の重点支援の評価結果について」文部科学省、2016年3月9日。

「ミッションの再定義」を踏まえた速やかな組織改革が必要ではないか。特に教員養成系学部・大学院、人文社会科学系学部・大学院については、18歳人口の減少や人材需要、教育研究水準の確保、国立大学としての役割等を踏まえた組織見直し計画を策定し、組織の廃止や社会的要請の高い分野への転換に積極的に取り組むべきではないか。

教員養成系、人文社会学系の学部大学院は不要であると言っているようにしか読めないこの文書は、大学教員とりわけ文系の教員たちに驚きと怒りをもって迎えられた。批判の声が巻き起こり、私自身もブログの記事やメディアの関連記事への協力、著作の刊行などで問題点を指摘してきた。だが残念ながら「改革」の嵐は収まるようすはない。

現在、多くの国立大学で新学部・新研究科の設立が始まっている。その形態はさまざまだが上記の三分類に沿わせつつ、人文社会系と教員養成系の既存組織の規模縮小や転換が進行中である。人文社会系学部・大学院にもその影響は当然及びつつあるが、より深刻なダメージを受けているのは教員養成系学部・大学院である。日本の教員養成系学部・大学院には多くの日本文学研究者が所属している。「国語」の教員養成のために、「教科専門」などと呼ばれる分野を担当するのである。つまり、教員としての高度な知識を身につけるために、文学研究や日本語学、漢文学などの専門研究者が配置されているのである。これらの教科専門の研究者が、いま立場が危うくなりつつある。教員養成系大学・大学院は、より「実践的」な教育を行うことが必要で、高度な専門的知識は必要ないというのが、教育学部「改革」を進める勢力の基本的な発想であるらしい。

もう一つ、盛んに唱えられているのが大学の「グローバル化」である。タイムス・ハイヤー・エデュケーション (THE) などをはじめとする大学ランキングが話題に上り、外国人教員や留学生数の増加が目指されている。英語による講義の数を増やすということも、目標の一つである。私の所属校にも、ほとんどの学部／研究科に英語コースが作られた。文学部にも「アジアの中の日本文化」コースというのができている。のちに改めてふれようと思うがグローバル化そのものは、学術にとって悪いことではないと私は思っている。ただし、それが健全なかたちでなされる限りにおいては。

2. 研究環境と出版状況の変化

次は、文学研究に絞った変化について概観を試みる。まず、2000年代以降の傾向として定着したのは、大学院生の博士論文が出版されるという道筋である。以前は、単著の研究図書の刊行は、かなり経験を積んだ年長者の行うことだというイメージが強かったと聞く。それが2000年代に入ってから、大学院を出てすぐぐらゐの若手が本を出すという状況へと変化した。背景には博士号取得者の増加と、就職難がある。ほぼ同じぐらゐの時期から、課程博士号を積極的に与える大学院が増え、博士号取得者が増えた。

ちょうど日本の第二次ベビー・ブーマーが大学に職を求める時期と重なり、研究職に就くことが非常に難しくなった。博士号を取得しても決定的な業績にならないことがわかると、次は博士論文を出版することによって競争を勝ち抜こうとする状況に至ったわけである。

研究環境で言えば、デジタル化がようやく進みつつある。国立国会図書館デジタルコレクションは公開点数をどんどんと増やしているし、2014年には、「館内限定」とされていた資料を連携図書館において見ることができるサービスも始めた。一般公開されているデジタルコレクションは、著作権が切れた資料だけが対象である。だが国会図書館がデジタル化している資料は、著作権保護期間中のものも含めた膨大な数に上っている。これらは「館内限定」での閲覧——つまり実際の訪問と同じ扱い——で閲覧に供されてきたが、これが他の地域の図書館でも見られるようになったのである。これは非常にありがたい変化であった(ただし提携館の数はまだまだ少ない)。国会図書館は「国会図書館サーチ」という統合検索サービスも始めており、図書の検索だけでなく、雑誌記事の検索、他の公共図書館の蔵書検索など複数のサービスを横断的に調べられるようになっている。

『朝日新聞』や『読売新聞』『毎日新聞』などの大手新聞も、ほぼデジタル化を完了している。契約した図書館等でなければ見ることはできないが、見出しや、場合によっては本文の検索もできるようになっており、有用である。

各大学がリポジトリとよぶ、自分たちの大学に関連した研究成果を電子公開する流れも加速している。背景には、電子ジャーナルの高騰という世界的な問題も存在する。無料で研究成果にアクセスできる状態を提供するための基盤整備である。これが進み、まだまだ数は少ないが、検索結果に表れた論文をそのままパソコンで読める場合も増えて来た。

研究資金の性格の変化も、研究のあり方に影を落としているように思う。現在、どこの大学でも、無条件に与えられる研究費の額が大きく減っており、そのかわりに科研費をはじめとする外部資金を獲得してくるよう求められる。外部資金は、研究計画を立案し、場合によっては研究チームを結成し、そして短期的な成果が求められる。これが研究を活性化している面はたしかにあるが、より資金を獲得しやすいテーマが選ばれがちになることは否めない。時間のかかるテーマ、関心を引きにくいテーマには、研究資金も研究時間も割きにくい構造になっている。

外部資金の増加が複数の研究者によるチーム研究を増加させていることは今述べたが、この傾向が外国の研究者との連携を増やす効果を生んでいる。とりわけ、満洲や上海、朝鮮半島、台湾など旧植民地、日本人居留地の研究においては、中国、韓国、台湾などの研究者と共同研究を行う機会が増えている。

なお、どのような研究計画が科研費を獲得しているのかについては、最後にあらためて検討する。

3. 現在の政治的状況

ここで、現在の日本の政権の政治的傾向およびそれに呼応する排外主義的な一部の市民の傾向と、日本文学研究の状況について触れておく。安倍晋三首相率いる現在の政権が、視野の狭い自国愛にとりつかれており、教育、軍備、歴史認識などにおいて戦後日本の枠組みを大きく修正しようとしていることは、海外のメディアでも伝えられているところだろう。この政権のもと、文部科学省は学校教育において日本文化を教えることを重視し、愛国心を強めよう、日本人としてのアイデンティティを強化しようという方向を打ち出している。海外においても、ジャパン・ハウスという日本文化についての広報施設の設置や、アメリカの著名大学の日本学講座に対する財政支援など、日本文化の海外発信にも熱心である。

大学も無縁ではない。2015年には文部科学省が大学に対し、入学式や卒業式で国旗を掲揚し、国歌を歌わせるよう「要請」する方針を示した。従った大学も、従わなかった大学もあり、対応は分かれた。

首相官邸に設置された教育再生実行会議による「これからの大学教育等の在り方について(第三次提言)」(2013年5月28日)という文書には、大学をグローバル化するための提言が含まれているが、そのなかに「日本人としてのアイデンティティを高め、日本文化を世界に発信する」という条項がある。こうした素朴な愛国心が、そのまま高等教育についての政府目標になってしまうことについては、悲しみを通り越して滑稽さすら感じる。

一部の歴史修正主義的な新聞と、それに呼応する政治思想を持った市民(団体)が、大学で行われている講義に直接的に介入を始めていることも、最近の大きな特徴である。2014年には従軍慰安婦についてのドキュメンタリーを上映した、ある大学の授業が攻撃を受けた。授業の受講生が新聞に投書し、それが大きく取り上げられた。これを受けて、大学に抗議の電話が多くかけられ、政治思想を同じくする国会議員が文部科学省に見解を求めるということも起こった。

日本文学に関連する授業が、こうした攻撃の対象になったという話は今のところ聞いていない。むしろ、「日本文化」への関心を高めようという政権の方針からすれば、日本文学についての教育研究は、親和的でさえありうる。だが火種はくすぶっていると考えておいた方がいいだろう。「反日的」とみなされる授業や言動を行ったとき、いつどこで攻撃の火の手が上がってもおかしくないと、私自身は感じている。日本国内で生活する東アジア出身の留学生や教員は、より敏感に、危険の中にいることを感じているはずである。

4. 大学院生に関する変化

1990年代と比べて大学院生の数は日本文学分野全体として減少している。とりわけ、古典文学研究ではこの傾向は顕著で、学会の高齢化が進行しているとも聞き及ぶ。近代文学研究でも同様だが、近年の院生数のピークは、1970年代前半生まれの第二次ベビー・ブーマーたちが院生だった時代にあったが、その後は人口減が続いており、そのまま院生数の減少に結びついている。さらに景気の悪化が重なり、大学における日本文学系講座やポストの縮小傾向も追い打ちを掛け、まず古典分野の教員の削減が先行した。当然、これは院生たちにとって深刻な就職難をもたらした。大学院の入学志願者が減るのは、当然である。

そしてこの院生数、正確に言うとは日本人院生数の減少を、留学生の大学院生たちが補填しているという現象がある。大学によって比率の違いはあるが、相対的に学費の安い国立大学大学院の日本文学系講座においては、現在約半分ほどが留学生となっているはずである。

出身国にも変化がある。私が大学院生時代を送った1990年代後半においては、留学生の多数派は韓国人だった。現在はほとんどの大学で、九割方を中国大陆からの留学生が占めているのではないか。余談だが、韓国人留学生は終了後に帰国する割合が高いが、中国大陆からの留学生は修士課程修了後に、日本の企業に就職することも珍しくない。大学のみならず、日本の社会にとっても大きな変化である。

海外で日本文学を教えている大学教員からしばしば聞くのは、日本文学を専攻する学生たちの「入り口」がマンガやアニメなどのポップカルチャーとなっているという話である。私の講座に入学する留学生たちは表だってそれを言わないが、親しくなってから聞いてみれば、マンガやテレビアニメ、アイドルグループなどのファンである(あった)ことがしばしばである。この変化をどう考えればよいかは、まだよくわからない。ただ、日本における日本近代文化研究が、ポップカルチャーの研究をうまく進められていない——一部の文学研究者、社会学者、映画研究者などが扱ってはいるが、ただし大学のポストはわずかである——ことはたしかである。その意味では、潜在的な需要を救い損ねており、社会に向かって発するべきこの分野についてのアカデミックな知見を産出できていない状態にある。ただし、学生の興味関心や授業の受容と、学界の興味関心、そして大学のポストとが必ずしも一致しないのは、どこの国でも同じであろう。

5. 日本における近現代文学研究の最近の動向

近年の近現代文学研究の対象領域としては、どのような動向がみられるのか、まずは個人的な観察をもとに概観してみる。「戦後50年」の節目以降の傾向だが、戦後についての研究は厚みを増している。とりわけプラング文庫の資料を用いたGHQ占領期の検閲

研究は目覚ましい進展を見せた。ジャーナリズム研究者の山本武利が牽引したプランゲ文庫のデータベース化と分析が特筆されるべきだが、岩波書店の『占領期雑誌資料大系』(2008-10年)も刊行されている。近代文学研究者でも横手一彦、十重田裕一、川崎賢子、天野知幸らが考察を発表している²。

戦後文化の研究も進んでおり、サークル運動などについては不二出版の『戦後文化運動雑誌叢書』など雑誌復刻もあって関心が集まっている。充実した宇野田尚哉・道場親信ほか編『「サークルの時代」を読む——戦後文化運動研究への招待』(影書房、2016年)が刊行されており、中村不二夫、水溜真由美、鳥羽耕史、坪井秀人らにも論考がある³。高度経済成長期についても石川巧の『高度経済成長期の文学』⁴が出た。

ライトノベルについても、研究の蓄積が増えた。一柳廣孝と久米依子の編集による二つの論文集があり、大橋崇行と山中智省が編者を務めたシリーズ『ライトノベル・フロンタライン』3巻もある⁵。

研究会としては2014年に十九世紀文学研究会(発起人・山田俊治、谷川恵一、高木元、中丸宣明)が発足したことが注目される。学会形式ではなく、会員制度も取っていないという。故・花田俊典の呼びかけで始まり、長野秀樹や川口隆行らが運営に関わる原爆文学研究会も熱心で質の高い研究を続けている。この他活発な個人作家研究会・学会として、横光利一文学会、有島武郎研究会、宮沢賢治研究会、国際芥川龍之介学会がある。谷崎潤一郎研究会は、残念ながら最近休止となった。

その他、任意に上げていけば、谷崎潤一郎の新全集が刊行され、新資料も続々と発見(公表)されている。戦争の記憶や、あるいは戦場を描く文学にも関心が高まっていると感じる。2015年は「戦後70年」の節目となっているということもあろうが、むしろ日本社会に「戦前」の色が濃くなっているという不安が関係しているのではないか。さほど活発に研究が進められているわけではないが、西田谷洋が先鞭を付けた認知物語論についても新しい課題として注目しておくべきだろう。私自身も発表をしたり論考を書いたりしたが、若い研究者から質問をしばしば受け、潜在的な関心が広がっていると感じた。最後に東アジアと同時代日本語文学フォーラムおよびその機関誌『跨境 日本語文学研究』

² 代表的なもののみを挙げる。以下同。横手一彦『被占領下の文学に関する基礎的研究 資料編』(武蔵野書房、1995年)。十重田裕一「交錯する二つの検閲の痕跡——占領期日本の文学テキスト再検討の視点」(『昭和文学研究』62、2011年)。川崎賢子「GHQ検閲と「古典」評価の変容(特集プランゲ文庫研究の10年)」(『Intelligence』12、2012年)。天野知幸「「満洲文学」のゆくえ——GHQ/SCAP検閲と地方雑誌の調査を踏まえた考察」(『京都教育大学国文学会誌』39、2013年)。

³ 中村不二夫『戦後サークル詩の系譜——中村不二夫詩論集』(ナカニシヤ出版、2013年)。水溜真由美『「サークル村」と森崎和江——交流と連帯のヴィジョン』(ナカニシヤ出版、2013年)。鳥羽耕史「文壇とその外部——九五〇年代のサークル詩集、生活記録集の編集をめぐる」(『文学』17(3)、2016年)。坪井秀人「サークル運動評価の困難さ」(『社会文学』33、2011年)。

⁴ 石川巧『高度経済成長期の文学』(ひつじ書房、2012年)。

⁵ 一柳廣孝・久米依子編『ライトノベル研究序説』(青弓社、2009年)。一柳廣孝・久米依子編著『ライトノベル・スタディーズ』(青弓社、2013年)。大橋崇行・山中智省編著『ライトノベル・フロンタライン』1-3(青弓社、2015-2016年)。なお大橋には単著『ライトノベルから見た少女／少年小説史——現代日本の物語文化を見直すために』(笠間書院、2014)もある。

についても、関心が寄せられていることをつけ加えよう。東アジアの複数地域との研究
連関という形を取りつつ、年刊の査読誌を発行したことは日本文学研究の新しい時代を
切り開くものとして評価されている。

6. 科研費データベースから見る最近の動向

以上は私見による整理だが、より客観的なデータも利用してみよう。現在、日本で
大学などに所属して研究を行う研究者のもっとも重要な外部的(つまり勤務校以外の)研
究資金源となっている科学研究費補助金の、データベース「科学研究費助成事業デー
タベース」を利用する。

グラフ1は1972年から2017年までの、「国文学／日本文学」分野の採択件数のグラフで
ある。増減の波はあるが、基本的には大きく増加していることが分かる。背景には、所
属校の研究予算が減らされ、外部の競争的資金を得ようとする研究者が増えていること
がある。グラフ2は全分野の採択件数のうちに「国文学／日本文学」が占める割合のグラ
フである。1980年代から90年代にかけて落ち込みがみられるが、その後は上昇してい
る。とはいえ、0.17%~0.45%の範囲内での増減であり、さほど有意とは言えない
かもしれない。ただ、全体の採択件数が減る時には、占有割合も低下しているようには
見える。つまり、減額の影響を受けやすい分野だとは言えそうだ。

グラフ 1

グラフ 2

表 1 には、2013年から2017年まで5年間の近現代文学・文化にかかわるすべての採択課題のタイトルを示した。手元の集計では合計240件である。日本文学分野全体は613件なので、近現代文学で39.1%となる。

全体を見渡した特徴は、分散的だということである。こうした報告で述べることとしてはインパクトがないようだが、つまり、いろいろな研究が幅広くなされているということである。「面白くない指摘」だが、しかし研究分野全体の健全さを示すものとして、歓迎すべきことだと私は捉えた。ただし、研究の中心はあきらかに戦後すなわち1945年以降の文学・文化に移りつつある。戦前期の研究も依然多いが、20年前と比べればその遷移は明瞭だろう。

全体として分散的だとはいえ、いくつか重なりが観察される関心領域がないわけではない。一つは、先にも述べたGHQの占領および検閲に関わる研究である。またメディアへの注目も従来から引き続いていることが確認できる。近年の傾向として、一つのメディアに注目するだけでなく、メディア・ミックスを分析の軸とする課題が増えていると言えるかもしれない。よくある論の構えではあるが、受容研究や、前時代との接続を考察するような課題も依然として人気がある。この変形とさえ言えるが、美術や映画など隣接領域との交渉も課題として選ばれやすい。地域性に目を向けると、欧米よりもアジアとの関係に着眼する研究が多い。中国大陆に着目する研究が増えつつあり、南米を題材とする研究が現れるようになった。外部資金調達という目的に合致しやすいためかもしれないが、資料調査およびそのデジタル化は、さまざまな所蔵先や作家について進められていることが確認できる。その他、障害者やハンセン病について注目する視点もある。探偵小説・推理小説も比較的関心を集めているテーマのようである。

科研費の採択課題は、大学などに所属する研究者と、日本学術振興会の特別研究員に

採用された若手研究者の申請をもとにしている。一応、全世代の研究者をカバーするデータだとは言えるが、もっとも厚い層は、30~50歳代の研究者だろう。また、短期間で成果を求められる学外の競争的資金であることから、より獲得しやすい課題に誘導されるという傾向がある。したがって、実際には遂行されているが、評価を得にくい課題（たとえば現代文学や「正典的すぎる」作家など）であったり、長期的な課題であったりするものは、ここに現れにくい仕組みとなっている。

今回は分析できなかったが、『日本近代文学』や『日本文学』『昭和文学研究』といった全国レベルの学会誌に掲載された論文の傾向を分析したり、国会図書館のNDL-OPACを利用したりして博士論文の傾向を調べることもできるだろう。現在の博士課程の学生たちが、どのようなテーマを選んでいるのかが、そこから見えてくるに違いない。

7. 近現代文学研究のこれからの課題

最後に、日本の近現代文学研究が取り組むべき課題について、簡単に私見を述べて結びましょう。研究が手薄な領域としては、1970年代以降の文学がある。とりわけ、文学史としてはまだ広く共有される枠組みが提示されていない。戦後の大衆文学についても関心の濃淡が大きい。戦後の文芸メディアの研究についても、きちんとした整理はされていない。

日本以外の地域で行われている日本文学研究の成果を、日本語を用いて日本で研究している研究者たちに、どのようにしてより容易にアクセスできるようにするかというのも、重要だが難しい課題だ。同様に、日本で行われている研究も、より広く海外の研究者たちに読まれるためにはなにをすれば良いのかも、考えた方がよいだろう。日本語の論文を組織的に英訳して刊行する——たとえば雑誌ごと——などということも検討してもよいのではないか。

日本国内の大学で教鞭を執る外国人の日本文学研究者の数も、もっと増やすべきだろう。現在の留学生の比率からすれば、そうなって当然である。外国人研究者が増えれば、自然と、学界の関心や手法、形態も新しい展開を迎えるだろうし、学部大学院への学生の集まり方も変わってくるだろう。

表1：近現代文学・文化にかかわる科研費採択課題タイトル 2013-2017

開始年度	研究課題／ 領域番号	研究課題名
2013	25884067	日本近代文学における座談会の文学・批評的意義
	25870285	戦後アヴァンギャルド芸術によるジャンルと国境の横断－安部公房を事例に
	25870079	1960年代の文学と視覚メディアの交錯についての文体論的研究
	25770095	1920-30年代における「文学の価値化」と「価値哲学」の理論的関係の研究
	25770094	井伏鱒二作品における地方表象の研究—1930-50年代を中心に
	25770091	日本近代文学における「文学賞」の意義と作用—「改造」懸賞創作を中心に
	25770090	1930-40年代の朝鮮、台湾、満洲における日本語文学と「言説の磁場」の検討
	25770088	＜近代説話＞の研究－明治大正期の実録、実記、講談本から歴史小説、大衆文学へ－
	25770086	1920-30年代の大衆文学の展開とメディア・ミックス現象に関する総合的研究
	25770084	1960年代のテレビ文化黎明期におけるテレビドラマ制作と＜文学＞
	25770083	「営業案内」「職業案内」に関する出版史料の価値の検討
	25770080	江戸川乱歩旧蔵書の書誌調査
	25770076	夏目漱石初期・中期作品における表現の視覚性
	25770073	1920年代の日本モダニズム文学における「東洋」・「伝統」言説の形成
	25704006	知的障害者表象に関する比較文学研究とデータベースの構築
	25580058	忍者と探偵、近代日本におけるキャラクター表象の形成と海外伝播に関する文化研究
	25580057	近代日本の人文知形成に関する基礎研究—『郵便報知新聞』掲載外国小説原典調査から
	25580055	戦時下文学史の再編成に向けて－階層性とジェンダーの観点から－
	25580054	「世界戦略」としての三島由紀夫
	25370255	文化政治前期の植民地朝鮮における図書館と＜翻訳＞—日韓文化交流史の再構築—
	25370253	「長崎そのときの被爆少女」成立過程確定を軸とした長崎原爆文学に関する基盤的研究
	25370251	日本統治下上海を中心とした中支各地域における日本語文学状況の基礎的研究
	25370249	全集未収資料集の作成による藤村研究の再構築
	25370246	大岡昇平文学の基盤的および総合的研究—創作ノート・原稿類を含む—
	25370242	日本近代文学館他における川端康成・肉筆資料の調査研究
	25370240	1950-60年代日本文学の英語訳に関する基礎的研究
	25370239	「歴史・時代小説ブーム」の戦後精神史(二大作家の比較研究による)
	25370238	宮沢賢治の草稿生成論的研究—『風の又三郎』を中心に—
	25370233	林芙美子文学から見る近現代アジア諸国の研究
	25370228	森家所蔵森敦自筆資料による基礎的研究
	25370227	倉敷市蔵「薄田泣菫文庫」の調査及び関連書誌の作成と分析
	25370225	夏目漱石の文芸と美術との相関—漱石文庫資料による実証的研究
	25370223	松代・一関・南部・秋田各藩の和歌活動・俳諧活動による大名文化圏形成解明の新研究
	25370222	博覧会の時代と泉鏡花
	25370221	本地垂迹の視点から見た慈円法楽歌についての基礎的考察
	25370220	戦後沖縄文学に関する思想史的研究
	25370217	分析書誌学と出版史的方法による近代日本における書物の制度化の解明
	25370215	全国書房ネットワークの総合的研究—戦時下～占領期における文学と出版メディア—
	25370213	幕末から明治初期の岐阜の芝居(劇場と役者)の実態
	25370208	明治期の＜知＞とメディア言説を通してみた軍記文学の文化的展開に関する基礎的研究
	25370207	近世近代の枠を越えた十九世紀絵入小説史を記述するための書誌学的研究
	25370205	占領期ローカルメディアに見る文学者・出版関係者のネットワーク形成に関する研究
	25370204	1960年代～70年代の日本の放送メディアにおける寺山修司の創作活動の研究
	25370202	森鴎外の訳業を媒体とした1910年代日欧文化情報伝達の調査と分析

開始年度	研究課題／ 領域番号	研究課題名
	25284052	中日文化協会上海分会と関連文学者・文化人に関する基礎的・総合的研究
2014	26884076	明治期の西鶴流行現象における内田不知庵の西鶴評価と翻刻出版に関する総合的研究
	26884052	台本を基礎資料とする明治期歌舞伎の作品研究
	26870514	現代文学における「地域」と「開発」をめぐる系譜学的研究
	26870132	近現代日本における古典文学の受容と関連文化財の評価の連動性
	26870069	明治後期の日本外地における漢詩文活動とその思想の実証的研究——靑山衣洲を中心に
	26770094	1920-50年代の東アジア／日本の言論インフラをめぐる総合的研究
	26770092	日本近代文学における翻訳と創作の創造的連関
	26770091	日満文学者の交流に関する総合的調査と研究——川端康成の旧満州紀行を一事例として——
	26770089	<戦後>雑誌における文学者の美術批評に関する基礎的研究
	26770087	<旧訳>を中心とした谷崎源氏テクストに関する基礎的研究——翻訳文学としての再検討——
	26770086	佐藤春夫旧蔵資料による文壇ネットワークの解析
	26770085	未活字化の日記資料群からみる近代日本の青年知識層における自己形成の研究
	26770083	戦時体制下における雑誌メディアの書誌的研究
	26770080	出版メディアを基盤とした江戸板浮世草子・俳諧及び作者の総合的研究
	26770078	終戦直後の新聞小説の研究——織田作之助を中心に
	26580048	日本近代文学における活字文化と美術との共鳴に関する研究
	26580047	欧米並びにアジアとの比較を介した日本近代文学及び映画における死の表象の再構築
	26370264	戦後日本文学の再「転向」——舟橋家所蔵資料による大衆文学の新視点
	26370263	夏目漱石によるイギリス受容——小説理論の構築の一環として
	26370262	言文一致運動と近代における短歌表現の研究
	26370261	地方における文芸コミュニティの形成と変容に関する研究——暮鳥会寄託資料を軸として
	26370260	朝鮮総督府発行教科書・教授書・編纂趣意書に見られる「同化思想」の形成について
	26370258	折口信夫旧蔵資料の調査とその評価を通じた同時代文学の資料学的研究
	26370254	GHQ占領期における近代化及び古典再編に関する諸言説分析を総合する文芸史的研究
	26370253	明治・大正期文学の中産階級読者から見た「女の謎」表象に関する総合的研究
	26370250	中南米日系移民および韓国系移民による文学に関する総合的研究
	26370249	文学雑誌「若草」における読者階層の形成と混交をめぐる総合的研究
	26370248	近世仏教説話集の形成・出版・享受についての研究——地蔵寺所蔵文献との関わりから
	26370247	和刻本漢籍における近世中期の通俗的注釈書の研究
	26370246	テキスト面からみた春本研究……戯作者と春本
	26370245	地方青年結社における「文」の実践に関する社会史研究
	26370244	福永武彦、その文学の生成と展開
	26370243	ポストコロニアル台湾の日本語作家・黄雲芝に関する総体的研究
	26370240	朝鮮詠の領分——朝鮮俳句とその俳人脈をめぐる総合的研究
	26370238	広島的女性作家・岡田(永代)美知代に関する基礎的および総合的研究
	26370235	広津柳浪作品分析を中心とした明治三十年代文学の鳥瞰
	26370233	伊藤永之介の文学がとらえた近代日本農村開発史：発電所建設から八郎湯干拓まで
	26370230	森鴎外「棕鳥通信」に見る「スバル」「三田文学」の雑誌間交流に関する研究
	26370228	1930年代日本の経済と地方・農村・満洲の文学における表象に関する研究
	26370226	メディア環境との相関性に基づく日本探偵小説の史的研究
	26370222	近代日本児童出版文化史の研究——明治期における博文館出版文化の内容と特質
	26370216	東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理とアーカイブ化
	26284038	核・原爆と表象／文学に関する総合的研究
	14J09614	明治期娯楽読物の体系的研究——押川春浪作品の生成と受容の様相を端緒として——

開始年度	研究課題／ 領域番号	研究課題名
	14J09316	近代における義太夫節の受容ー明治・大正期の素人義太夫を中心に
	14J08618	1920-1930年代における日本の探偵小説ジャンルの研究
	14J08431	昭和三十年代の三島由紀夫文学における<自己同一性>と<ナショナリズム>の研究
	14J07016	日本近現代文学における性の構成の比較文学的研究ー川端康成の作品を起点として
	14J03653	谷崎潤一郎の文学的営為の転回ー映画制作から古典受容までー
2015	15KK0067	夏目漱石によるイギリス受容ー小説理論の構築の一環として(国際共同研究強化)
	15K21000	明治期の詠史詩集の研究ー大沼枕山『歴代詠史百律』『日本詠史百律』を中心として
	15K16694	明治期<文芸メディア>研究基盤構築のための錦絵データベースの作成
	15K16693	被爆と復興をめぐる文学・文化の研究ー長崎を中心にー
	15K16690	戦後日本における詩的言語の公共性に関する総合的研究
	15K16689	谷崎潤一郎の肉筆資料と検閲制度の相関関係についての研究
	15K16687	戦後日本社会における<青空>表象の分析：ブランゲ文庫所蔵資料を中心に
	15K16685	日本近現代文学の視覚文化論的研究
	15K16682	戦後思潮における浪漫主義/全体主義の要素分析ー中河與一「天の夕顔」受容を軸に
	15K16681	戦後における<文学賞>の競合と社会的意義の拡大に関する研究ー1950年代まで
	15K16680	大正・昭和期の農民文学運動の研究ーアイルランド・日本・朝鮮の相互交渉を手がかりに
	15K16678	福永武彦における文化史的位相の研究
	15K12852	日中戦争の記憶と表象に関する総合的研究ー1940-1960年代を中心に
	15K02285	古典籍をめぐる幕末明治期における人的交流に関する基礎的研究
	15K02283	日本占領下北京における日本語文学の様相に関する基礎的研究ー「東亜新報」を中心
	15K02282	新資料川端康成「生徒の肩に枢をのせて」の関係資料収集と翻刻整理を目的とした研究
	15K02281	1920年代における海港都市神戸の文化的通路をめぐる多角的研究
	15K02279	火野葦平の戦中・戦後研究ー1930-50年代の自筆資料を基礎としてー
	15K02278	言説闘争としての日本近代詩史を再編する昭和期モダニズム出版物の研究
	15K02275	20世紀初頭における「中国」表象の受容・形成・展開についての総合的研究
	15K02274	20世紀前期日本近代文学における内務省・GHQ検閲の比較研究の国際的展開
	15K02273	日本近代文学における編集文献学の構築と確立のための研究
	15K02272	「土地の想像力」を生み出す近代文学の「風景表象」の空間構成
	15K02270	中野重治の肉筆原稿、書簡、日記他第一次資料研究
	15K02269	1920-30年代の「認識論」と「経済学」による文学の「価値化」に関する研究
	15K02268	冷戦アジアの「革命」とベトナム戦争における「日本語」の役割に関する研究
	15K02267	1950-70年代における文化資本・文化産業としての文学に関する総合的研究
	15K02264	十九世紀末の英米廉価版小説が日本近代文学に及ぼした影響
	15K02263	旧満洲亡命ロシア人の文学的表象に関する比較研究：日本語文学を中心に
	15K02262	ドイツ留学時代の森鷗外とジャポニズムー日独比較文学・文化の視点から
	15K02260	戦後派作家の長篇小説に関する総合的研究
	15K02259	日本語文学における検閲とジェンダー
	15K02258	大岡昇平と女性読者の関係についての総合的研究
	15K02250	太平洋戦争後の<戦後文学>に描かれたタイ表象の分析研究
	15K02246	白樺派からプロレタリア文学への文学的思想的展開の実証的研究
	15K02245	1930年前後における女性作家・知識人のヘゲモニー闘争ー『女人芸術』を通して
	15K02244	書物取次ネットワークと小売書店に関する研究：旧満洲・朝鮮半島・樺太等を中心に
	15K02243	昭和10年代における文学の<世界化>をめぐる総合的研究
	15K02241	デジタルアーカイブ構築による人文書院戦前期資料の多面的文化史研究
	15K02240	太宰治直筆資料のデジタル化、オンライン公開に関する基盤整備の研究

開始年度	研究課題／ 領域番号	研究課題名
	15K02239	方法としての有島武郎—1920年代の朝鮮文壇における女性・子供・労働者の表象
	15K02238	戦前期プロレタリア文化運動資料研究
	15K02212	近世～近代における風土記研究と郷土意識に関する研究
	15K02211	民間の視座を導入した中国通俗文芸受容史の構築—明治以後の民間翻訳をキーワードに—
	15H06845	アイヌ英雄叙事詩における伝承の流動性に関する研究
	15H06735	明治期の極東における和刻本漢籍の流通
	15H06721	20世紀前半の渡欧日本知識人達の人的ネットワーク再考
	15H06630	森鷗外の歴史叙述の成立過程に関する研究—日独資料による知的ネットワークの可視化
	15H06350	文学と美術の交流—小村雪岱の小説挿絵に関する研究—
	15H06257	中国の連環画における日本文学の翻訳と再創作
2016	16K21071	戦後アヴァンギャルド芸術における協働と影響の研究—草月を軸に
	16K20892	1960-70年代の前衛芸術における「東北」表象の構築 寺山修司・土方巽を視座に
	16K16780	明治期の近代文体成立過程における批評家内田不知庵の翻訳言説と文学概念に関する研究
	16K16779	近代日本における言論統制とその解放に関する総合的研究
	16K16778	芥川龍之介編纂英語副読本についての基礎的研究
	16K16777	習作期における三島由紀夫文学生成過程の解明
	16K16776	書簡・草稿を中心とする高見順資料の調査研究
	16K16772	翻訳と創作の創造的連関—昭和期の世界文学の受容と概念形成
	16K16764	大正期旧制中等教育国語教科書収録作品の研究
	16K16761	戦前期ドイツにおける日本プロレタリア文学の翻訳と受容に関する研究
	16K16760	文学者の「口語文」観—作家による文章論・古典の現代語訳の史的研究
	16K13196	岩波書店における検閲と文学の総合的研究
	16K13194	作家・北杜夫の病跡学研究
	16K13193	南米を旅した作家たちの軌跡と作品の研究 相互交流の観点から
	16K13192	近代日本における将棋と文学の関係の総合的研究
	16K02432	新潟市新津美術館所蔵・坂口安吾旧蔵書の調査に基づいた創作原理に関する総合的研究
	16K02431	児童文学におけるロビンソン変形譚の受容研究——「食」が示す「生きる力」の考察
	16K02429	旧日本映画社撮影長崎原爆映像の超高度精密化と関連資料等による歴史的記録性の確立
	16K02428	汪兆銘政権勢力下における日本語文学状況の基礎的・発展的研究
	16K02427	日本支配下の戦時上海及びその周辺地域における日中漫画家交渉の基礎的研究
	16K02426	野上弥生子『台湾』及び台湾関連日本近代文学の史料적・文学的価値に関する複層的的研究
	16K02423	近・現代東南アジア地域における日本語文献の受容・流通についての研究
	16K02422	戦後占領期のカストリ雑誌と同時代の出版文化に関する総合的研究
	16K02421	中勘助の直筆資料のデジタル化基盤整備に伴う創作方法の解明に関する研究
	16K02420	日本近代文学と絵画のジャンル横断的交流に関する総合的研究
	16K02419	1940年代の東アジアにおける日本児童文化受容とナショナリズムに関する調査研究
	16K02417	自筆資料調査および実地踏査による森敦文学の総合的研究
	16K02414	1920-30年代における日韓文化交流に関する総合的研究
	16K02413	琉球弧における島尾敏雄受容史の構築
	16K02410	沖縄文学成立に関する基礎研究
	16K02407	薄田泣菫文庫の全容解明に向けての総合的研究—明治・大正文壇の思想的水脈として—
	16K02405	戦争文学／表象にみるジェンダーと記憶の政治
	16K02403	脱植民地過程における文学のナショナリズムとインターナショナルナリズム
	16K02402	1950年代文化運動における農村女性文学の研究：山代巴と無名の書き手たち
	16K02401	国民国家確立期の〈民族精神〉による〈国民文学〉の創生——鷗外・樽井・嘲風を中心に

開始年度	研究課題／ 領域番号	研究課題名
	16K02400	水上勉自筆資料の総合的調査による研究基盤形成
	16K02398	戦後児童文学にみる「文学」の体系化と規範化——少年少女向け叢書を中心に
	16K02397	近代日本の人文知形成と新聞小説—森田思軒の翻訳と大英帝国の情報ネットワーク
	16K02396	日本近代詩の翻訳不可能性に関する総合的研究
	16K02395	帝室博物館総長時代の森鷗外に関する研究 —博物館行政改革の学術的基盤とその形成—
	16K02385	日本統治下の台湾における能楽活動の基礎研究—資料に基づく台湾能楽史の構築をめざして
	16K02372	日本文学における「怪異」研究の基盤構築と国際的展開
	16K02366	近代山陰地域の漢詩と官僚出身政治家の文化教養環境—中国文学と日本史学の学際的研究
	16K02365	近世・近代日本における中国古典詩の受容とその社会への影響についての研究
	16K02360	アジアの植民地を訪れた日本人の紀行文に関する基礎的研究
	16H07396	旧植民地下の日本語文学と戦後文学における植民地表象の通史的研究
	16H07179	日本近現代文学におけるゴーリキーの受容・翻訳・影響に関する研究
	16H07112	戦後日本における詩的言語の公共性に関する総合的研究
	16H03386	占領期ローカルメディアに関する資料調査および総合的考察
2017	17K13400	谷崎潤一郎の自筆資料を用いた生成論的研究
	17K13398	田山花袋周辺における外国文学書の流通と受容に関する研究
	17K13397	活字化された日記資料群の総合と分析に基づく近代日本の「日記文化」の実態解明
	17K13396	19世紀末ドイツにおける人文主義と森鷗外の歴史叙述
	17K13393	宮崎夢柳作品における女性表象と「自由」の概念との連関性についての研究
	17K13391	戦後日本マンガはいかなる物語を描いたか—戦前・戦中期の児童文化との比較から—
	17K13390	明治中期の在野史学と文学の関連
	17K13383	「士大夫」阪口五峰からみる明治漢詩
	17K13381	近代日本の地域社会における雑誌メディアの普及と受容に関する研究
	17K02488	大正期における児童出版文化史の研究—実業之日本社の果たした役割
	17K02487	戦前期「サンデー毎日」と大衆文化に関する総合的研究
	17K02485	山村暮鳥「説教メモ」の総合的研究 —明治大正における詩的言語形成の底流の解明
	17K02484	戦前期の中国・樺太で刊行された日本語図書(文学関係中心)の書目総覧の作成
	17K02483	日英同盟期の外交と日本文学及び文化に関する基礎研究1880s-1920s
	17K02482	井伏鱒二未公開書簡の基礎的研究—文学の生成と「同学コミュニティ」の関係を視座に
	17K02478	上司小剣に関する研究基盤の構築
	17K02476	日本近現代文学における聴覚要素の表現的特徴に関する基礎的研究
	17K02473	日本近現代文学におけるフィクションの機能に関する総合的研究
	17K02472	テレビ文化黎明期におけるテレビドラマの芸術性と<文学>
	17K02469	泉名月氏旧蔵、泉鏡花未調査資料の実証的研究
	17K02468	ジャポニスム以後の浮世絵評価の比較研究—永井荷風と小島烏水を中心に
	17K02467	明治・大正期文学の内面叙述における「ジェンダー・トラブル」に関する総合的研究
	17K02466	国際的な視野から捉える林芙美子文学の研究～<多文化共生力>を探る～
	17K02464	<私>性の調査と<自己語り>ジャンルとの比較による日本「私小説」の総合的研究
	17K02462	1930年代新聞小説の多角的研究—山本有三・岸田國士・獅子文六を中心に
	17K02461	文芸雑誌「文藝首都」における新人育成と文壇ネットワーク形成に関する総合的研究
	17K02459	近代実録・講談本の研究—事件もの・歴史もの<説話>の生成と展開—
	17K02457	吉井勇の「戦中疎開日記」に基づく後期歌集並びに京都文化人グループについての研究
	17K02456	東アジアの笑話と日本語・日本文学に関する複合的研究
	17K02455	植民者二世の記憶と朝鮮表象—旧在朝鮮日本人の戦後と文芸創作の研究
	17K02453	三島由紀夫の演劇・映像・アダプテーションに関する総合的研究

開始年度	研究課題／ 領域番号	研究課題名
	17K02452	『台湾愛国婦人』の内容に関する多角的な研究
	17K02451	新聞小説と挿絵の相関性解明を基盤とする大正昭和期の文化融合に関する総合的研究
	17K02450	1940年代の新聞における文芸欄の基礎的研究
	17K02449	1930年代の満州国における日韓交流史の研究—＜移民＞と＜民族協和＞—
	17K02448	開発／再開発の表象に関する多角的視野からの研究
	17K02433	明治の「文明開化新詩」と清末の「詩界革命」—近代日中漢詩交流における「逆輸入」
	17K02432	東海地域近世・近代能楽資料の収集・整理とアーカイブ化
	17K02431	地域文化としての能楽の継承に関する調査研究—豊橋市魚町伝来の狂言伝書をもとに—
	17K02430	冷戦期日本文学の変容と国際性をめぐる総合的研究-GHQ検閲・指導から助成・招聘へ
	17K02414	出版流通史的分析による近代奈良県の書物文化環境の解明
	17K02413	戦前期カナダ日系移民の文学環境の研究 —エスニック紙『大陸日報』文芸記事を読む—
	17K02410	明治の能楽復興における華族の役割——前田家周辺からの再検討——
	17K02408	狩野亨吉文書の調査を中心とした近代日本の知的ネットワークに関する基礎研究
	17H07296	北園克衛、瀧口修造、西脇順三郎における欧米モダニズムの受容に関する研究
	17H07171	日本近代文学における異文化圏への越境に関する研究—永井荷風の文学活動を中心に
	17H02315	＜難民＞の時代とその表現：1930—50年代北東アジアにおける移動と文化活動

日比嘉高 Yoshitaka HIBI

(日本)名古屋大学大学院人文学研究科准教授。日本近現代文学・文化研究、移民文学・文化研究、出版文化研究。『(自己表象)の文学史——自分を書く小説の登場』(翰林書房、2002)、『ジャパニーズ・アメリカ移民文学、出版文化、収容所』(新曜社、2014)、『いま、大学で何が起きているのか』(ひつじ書房、2015)、『文学の歴史をどう書き直すのか 二〇世紀日本の小説・空間・メディア』(笠間書院、2016)、『図書館情調』(編著、皓星社、2017)、『連続討議 文系学部解体—大学の未来@横浜国立大学』(室井尚編、共著、読書人、2017)、『「ポスト真実」の時代「信じたいウソ」が「事実」に勝る世界をどう生き抜くか』(津田大介との共著、祥伝社、2017)など。